

ミュージアムパーク茨城県自然博物館
令和7年度第1回博物館協議会の開催結果概要（議事録）

1 日時

令和7年12月3日（水）14時00分～15時30分

2 場所

ミュージアムパーク茨城県自然博物館 講座室

3 出席者

樋口正信委員（委員長）、生田目美紀委員（副委員長）、青木尚美委員、浅野直俊委員、荒木郁子委員、坂本和弘委員、高尾戸美委員、中村由香委員、吉富友恭委員、鷺田美加委員

※事務局出席者

横山一己館長、菅野弘司副館長、泉水正和管理課長、岸川将史企画課長、小泉直孝教育課長、池澤広美資料課長、小池涉首席学芸員、栗栖宣博主査、清水麻里子係長、百瀬裕子主事、川村詩音主事

【文化課】

川野辺恒星主事

4 議事概要

(1) 会議の成立について

本日の協議会は委員13名中10名の参加があり、会議は有効に成立する。

(2) 議案説明（事務局）

○議題

- ① 令和7年度前期事業の報告について
- ② 令和7年度後期事業の計画について
- ③ 予算・決算などについて
- ④ その他

(3) 質疑・意見交換

○A 委員

- ・ 令和2・3年度以前の来館者数のデータや、県内のどの地域（県南・県西・県東・県北）から来館しているのか。
- ・ 来館者について、令和2・3年度以前の来館者数の変遷と県内のどの地域（県南・

県西・県東・県北) から来館しているのか知りたい。

○事務局

- ・ 来館者数については、平成 29 年度の恐竜展示リニューアルを契機に大きく増加し、年間約 50 万人に迫る水準となった。その後、令和元年（平成 31 年）には来館者数が 50 万人を超え、過去最高水準となったが、コロナ禍の影響により令和 2～3 年度は平均 25～28 万人程度まで大きく減少した。
しかし、その後は段階的に回復が進み、直近では約 48 万人まで戻っており、コロナ前の水準に着実に近づきつつある。
- ・ 県内の詳細な地域別データは把握していないが、駐車場のナンバーから推測すると県南・県西からの来館が多く、県北・鹿行地区からは少ないと感じている。県外では千葉・埼玉、中でも利根川沿いのエリアからの来館が多い。

○B 委員

- ・ 水戸方面でも招待券を配布すると、子育て世代が実際に足を運ぶケースが多い。

○事務局

- ・ 水戸方面で行った広報活動において、同様に好反応を示していただいている。
- ・ 市町村単位での「〇〇市デー」のような施策は有効とも思うが、財政面や実施範囲の検討が必要と考えている。

○B 委員

- ・ バス確保の問題から、近年は 12 月などの冬季に遠足を予定している学校が増えている。

○C 委員

- ・ リピーター対策として、企画展のターゲット層や狙いがあれば知りたい。

○事務局

- ・ 企画展では特定の年齢層に限定せず、子どもと保護者を中心に、誰でも楽しめる構成を意識している。

○D 委員

- ・ 昆虫の森の再生については、樹木の伐採が自然破壊と受け止められがちの中で、伐採後にどのように生物にとっていい環境になるのかを丁寧に伝えることが重要である。サクセッション(推移)を踏まえた管理の意義を来館者の地域に伝える取り組みは、とてもいい活動だと感じた。

○事務局

- ・ 昆虫の森の活用・再生についてご助言いただき感謝する。開館 30 年を迎え、昆虫の森はこのままでは常緑樹が増え過ぎてしまい、多様性の乏しい環境になってしまうことから、伐採を行い、コナラやクヌギなどの苗木を植栽し、長期的な視

点で多様性のある森を育てていく計画である。将来的には観察会などの実施も視野に入れている。現在開催中のどんぐり展でも、森の再生について紹介しているため、後ほどご覧いただきたい。

OD 委員

- ・ この時期での方針転換は非常に良いタイミングだと感じている、他館では、伐採した木材を活用し、紙をすいてポスターやノート、名刺などに使用する取組があり PR 効果が高い。コストはかかるが、積極的な広報につながると感じた。

OE 委員

- ・ 障害者利用が増加している点について、その内訳や背景を確認したい。
- ・ ポケット学芸員（Web 版）でどのように事前学習をすればいいのか知りたい。
- ・ 発達障害等に配慮した「カームダウンスペース」の設置を検討してはどうか。

○事務局

- ・ 特別な PR はしてないが、口コミ等で利用が増えている可能性がある。
- ・ 団体対応としては、予約時に事前相談を受け、車椅子利用、障害者等に配慮した対応を行っている。
- ・ ポケット学芸員（Web 版）は展示室・分野で検索する形式で活用を想定している。
- ・ カームダウンスペースのような箇所は当館には救護室があるだけで、そういったところの整備は整っていないので、今頂いた話を参考に検討していく。

OF 委員

- ・ 企画展について、「どの程度の人数が企画に関わっているのか。どのくらいの準備期間をかけているのか。」が気になった。
- ・ 現在の子どもたちは YouTube やゲームに触れる時間が多く、自然に触れて遊ぶ体験が減っている。保護者の安全面への不安から、散歩や自然体験が制限される現状もある。そのような状況の中で、自然博物館の企画展は、子どもだけでなく保護者にとっても学びの機会になっていると感じている。

○事務局

- ・ 企画展に携わる人数は、内容によって差はあるが、おおよそ 7~8 名。準備期間は概ね 3 年がかりで進めている。
- ・ デジタル化が進む中で、実物を見た体験から次の行動につなげる子どもたちの姿は、展示を行う側として嬉しい反応である。

OG 委員

- ・ 学習支援プログラムについて作り方やどういうものを完成させるのか、ポイントを教えてほしい。
- ・ デジタルアーカイブについて、専門家からどのような助言があったのか教えてほしい。

○事務局

- ・ 学習支援プログラムについて、数が多くわかりにくいとの意見を踏まえ、対象年齢別に整理し、ホームページ上で選びやすい形に再構成した。昨年度から展示資料を活用した映像コンテンツの制作にも取り組んでいる。
- ・ デジタルアーカイブについては、専門家から基本的な考え方や先進的に取り組んでいる博物館の事例紹介を受け、今後の方向性を整理していく段階である。
- ・ 具体的な取り組みとしては、既存の資料データベースの内容充実を検討している。併せて、学校教育での活用を見据え、教科書内容と連動した形での情報提供についても検討している。

○OG委員

- ・ 先進事例として紹介された博物館の中で特に参考になった点はあったのか。

○事務局

- ・ 先進事例では、一般利用者が検索しやすく、入口で内容が分かりやすいホームページ構成が参考になった。当館のホームページではデジタルアーカイブが表に出にくいいため、専用バナーの設置など、利用者がアクセスしやすい動線づくりが有効と感じた。
- ・ デジタルアーカイブの推進には、専門職の多数配置が必要であり、全ての博物館で実現させるのは難しい。デジタルアーカイブ化は、各館の体制や規模に応じた形で取り組むべきだと思う。

○OH委員

- ・ 来館者の集客について、県外からのリピーターが多い点は当館の強みである一方、周辺の文化・教育施設との連携は今後の課題だと感じる。周辺施設と連動した周遊対策（周遊パスポート、スタンプラリー等）を検討することで、来訪者の滞在価値を高められるのでは考えている。
- ・ 教育・文化・観光・資金調達等は単館で完結できるものではなく、横断的に情報共有・検討を行う推進体制を設けることで、当館の取り組みを県全体の制作と結び付けやすくなると感じた。

○事務局

- ・ 坂東市・常総市など地元市町村との連携を強化し、地域に根差した博物館としての存在感を高めていきたい。笠間陶芸美術館のような、地域と密着した運営事例を参考にしながら、当館に合った地域連携の形を模索している。
- ・ 横断的な取り組みの必要性は認識しているが、現状では横断的な組織は存在していない。各施設・部局の課題の違いを踏まえつつ、観光分野も視野に入れながら、教育委員会や知事部局、柔軟に検討を進めていきたい。

○OI委員

- ・ 男性も利用できる授乳室にリニューアルを行ったが、この取り組みに至るまで、

館内での勉強会やワークショップなど行っていたのか。

- ・ 来館動機調査における「SNS」はどの区分に含まれるのか。

○事務局

- ・ 授乳室に関しては、お客様からの意見として、男性も利用する授乳室を求める声が寄せられていた。世の中の動向も踏まえ、子どもが生まれた職員の当事者意見も聞きながら、使いやすさを重視して整備した。
- ・ 「SNS」は「インターネット」区分に含まれる。

○J 委員

- ・ 入館者数やリピーターが増加している中で、来館者がどの程度満足して帰館しているのか、またその満足度をどのように把握しているのかについて、具体的な方法を伺いたい。

○事務局

- ・ 満足度の測定方法については、評価の段階を設けるべきかどうかも含め、明確な整理ができていないのが現状である。
- ・ なお、来館者からの強い否定的意見や苦情はほとんど寄せられていない。

以上